

—いい音、浦安から—
J:COM浦安音楽ホール

Camille Thomas Cello Recital
カミーユ・トマ チェロ・リサイタル
萩原麻未 (ピアノ) Mami Hagiiwara, Piano

2022.6/29 (水) 19:00開演

■主催：浦安市 日本音楽財団
■共催：J:COM浦安音楽ホール
■助成：日本財団



日本音楽財団
NIPPON MUSIC FOUNDATION



モーリス・ラヴェル
2つのヘブライの歌より 第1曲「カディッシュ」
Maurice Ravel : 2 Melodies hebraiques

エドヴァルド・グリーグ
チェロ・ソナタ イ短調 Op.36
Edvard Grieg : Cello Sonata in A Minor, Op.36
I. Allegro agitato
II. Andante molto tranquillo
III. Allegro - Allegro molto e marcato

セルゲイ・ラフマニノフ
チェロ・ソナタ ト短調 Op.19
Sergei Rachmaninov : Cello Sonata in G Minor, Op.19
I. Lento - Allegro moderato
II. Allegro scherzando
III. Andante
IV. Allegro mosso

曲目・曲順は変更になる場合があります。

曲目解説：柴田克彦（音楽ライター）

モーリス・ラヴェル：2つのヘブライの歌より 第1曲「カディッシュ」

ドビュッシーに続くフランス近代音楽の大家モーリス・ラヴェル（1875-1937）の歌曲に基づく小品。オリジナルの「2つのヘブライの歌」は、1914年に作曲された作品で、ラヴェルが同年初めに耳にしたフランスの若きソプラノ歌手マドレーヌ・グレイの歌声に感激して書かれたという。ちなみに1914年は、バレエ音楽「ダフニスとクロエ」完成の2年後にあたるラヴェル39歳の年にして、第一世界大戦が始まった年でもある。全体は「カディッシュ」「永遠の謎」の2曲で構成。共に管弦楽伴奏版が作られているほか、ヴァイオリン+ピアノ、チェロ+ピアノ用の編曲版でもしばしば演奏されている。

今回披露される「カディッシュ」（これ自体は「聖なるもの」を意味している）は、ユダヤの祈りの歌。原曲は、元々シリアやメソポタミアの言語だったアラム語で書かれており、「王の中の王たる神の栄光に称えあれ。御身の治世は、我らイスラエルの子によって、永遠に求められるであろう」といった歌詞を持つ息の長い旋律が滔々と歌われる。チェロでの演奏の場合は、宗教的な荘厳さの中にも、切々たる情趣を感じさせる音楽となる。

エドヴァルド・グリーグ：チェロ・ソナタ イ短調 Op.36

ノルウェーの国民主義的な音楽を代表する作曲家エドヴァール・グリーグ（1843-1907）は、劇音楽「ペール・ギュント」やピアノ協奏曲、あるいは弦楽合奏のための「ホルベルク組曲」等で名高いが、純音楽的な室内楽曲も、弦楽四重奏曲、3つのヴァイオリン・ソナタ、そしてこのチェロ・ソナタを残している。これらは、ライプツィヒ音楽院で学んだドイツ音楽の流儀を継承する楽曲とみなされており、いずれも正統的な内容を有している。

本作は、1882~83年に地元のハルダンゲルやベルゲンで作曲され、3歳違いの兄ヨーン・グリーグに捧げられた。兄ヨーンは、やはりライプツィヒ音楽院で、名手として名高いユリウス・クレンゲルに学んだチェロ奏者。かなりの腕前の持ち主だったが、アマチュアとして演奏を楽しみ、グリーグのピアノとも共演していた。ちなみにグリーグは、若き日の1866年にも兄のために「間奏曲 イ短調」を書いており、本作はその延長線上で生み出された本格作といえるだろう。ただし初演は、1883年10月ドレスデンにて、ドイツのチェリスト、フリードリヒ・グリュッツマッハーとグリーグのピアノで行われ、その5日後にはライプツィヒで、クレンゲルとグリーグによって演奏されている。なおグリーグは後にこの曲で、当時若手のパブロ・カザルスとも共演している。

弦楽四重奏曲（1878年）と有名なヴァイオリン・ソナタ第3番（1887年）の間、「ペール・ギュント」（1876年）の7年後にあたる40歳の年に完成されたこの曲は、グリーグの作曲技法の円熟を反映した充実作となっている。曲は、北欧的な清冽さや憂愁を湛えながらも、情熱的でロマンティック。ピアノのヴィルトゥオーゾ的な活躍が際立っているが、チェロも最大限に響かせられるよう巧みに書かれている。また、劇音楽「十字軍のシグール」の「忠誠行進曲」の旋律を用いた第2楽章の第1主題をはじめ、自作が複数引用されている点も特徴をなしている。

第1楽章：アレグロ・アジタート。力強さの中に哀愁や切迫感を湛えた第1主題と、美しく抒情的な第2主題が交替しながら、激しさや熱気を持った音楽が展開される。最後の部分はピアノ協奏曲の第1楽章を彷彿させる。

第2楽章：アンダンテ・モルト・トランクイロ（穏やかに）。ハ長調の抒情的な緩徐楽章。共にピアノが出す北欧的な美感を秘めた第1主題と上昇し下降する短調の第2主題を、チェロが朗々と歌い継いでいく。

第3楽章：アレグロ―アレグロ・モルト・エ・マルカート。全曲中もっとも長大なフィナーレ楽章。チェロによる短い序奏に続いて、民俗舞曲風の第1主題が登場。力強く進んだ後、一旦落ち着いて穏やかな第2主題がピアノで奏される。以後変化に富んだ展開を長く続け、ピウ・アニマート・エ・ストレット（いっそう活気を持って、かつ急迫して）のコーダに至る。

セルゲイ・ラフマニノフ：チェロ・ソナタト短調 Op.19

チャイコフスキーの流れを汲む近代ロシアの作曲家セルゲイ・ラフマニノフ（1873―1943）は、歴史的な大ピアニストだったこともあってピアノ協奏曲や独奏曲が作品の中心をなし、近年は交響曲も人気を集めているが、二重奏以上の室内楽曲（ただしほとんどの作品にピアノが絡んでいる）も若干残している。そうした「悲しみの三重奏曲」第1番（1892年）、第2番（1893年）、「チェロとピアノのための2つの小品」（1892年）等の楽曲は、若き日における17歳年上の名チェリスト、アナトリー・ブランドゥコフ（1856―1930）との交流の中で生み出された。

そのひとつであるチェロ・ソナタは、交響曲第1番の酷評、面会した文豪トルストイの作品否定、初恋の人の結婚等によるスランプから立ち直って、代表作のピアノ協奏曲第2番を生み出した1901年、協奏曲に続いて作曲された。同年夏に着手され、12月に完成。同月モスクワにて、ブランドゥコフと作曲者のピアノにより初演され、ブランドゥコフに献呈された。なお本作は、ラフマニノフがピアノ以外のために書いた唯一のソナタでもある。

曲は、チェロが終始感傷的な旋律を歌い上げ、ピアノが独自の色合いを主張しながら絡んでいく長大なソナタ。憂愁と情熱が交錯する、20世紀初めの作とは思えないほどロマンティックな音楽であり、チェリストにはとりわけ人気が高い。ただし演奏者たちが口を揃えて言う通り、「ピアノの方がはるかに大変」。それは当然ピアノの名手ラフマニノフの作ゆえだが、その書法は時期が接近したピアノ協奏曲第2番との共通性を感じさせもする。また全4楽章の壮大な構成がなされている上に、前半2楽章が短調、後半2楽章が長調を基調としている点も特徴的だ。

第1楽章：レント―アレグロ・モデラート。憂鬱ながらも表情豊かな序奏から、憧れるような第1主題と、メランコリックな第2主題を軸にした主部へ。チェロとピアノの掛け合いを主体とする、歌謡的かつ情熱的な音楽が続く。この楽章はピアノがとりわけ活躍（カデンツァまでである）する。

第2楽章：アレグロ・スケルツァンド。ハ短調のスケルツォ楽章。激しさを秘めた第1主題と感傷的な第2主題を中心とした活発な主部に、穏やかで美しい中間部が挟まれる。

第3楽章：アンダンテ。甘美な旋律が両楽器で歌い継がれる夜想曲風の楽章。基調が変ホ長調に変わり、清澄な雰囲気強調される。ただし3連音が特徴的な中間部はハ短調。

第4楽章：アレグロ・モツ。エネルギッシュで壮大な、ト長調のフィナーレ。躍動的な第1主題と抒情的な第2主題が対照されながら、奔放な展開を遂げていく。最後は畳み掛けるように終結する。

Profile プロフィール



カミーユ・トマ (チェロ)

Camille Thomas, cello

1988年パリ生まれ。4歳でチェロを始め、2006年にベルリンへ渡り、ハンス・アイスラー音楽大学でシュテファン・フォルクとフランス・ヘルメルソンに学ぶ。その後、フランツ・リスト・ワイマール音楽大学でウォルフガング・エマヌエル・シュミットに師事した。これまでにパーヴォ・ヤルヴィ、ミッコ・フランク、マルコ・スーストロ、ダレル・アン、

ケント・ナガノ、ステファヌ・ドゥナーヴと共演した他、ブレーメン・ドイツフィルハーモニー管弦楽団、サンタ・チェチーリア国立アカデミー管弦楽団、シンフォニア・ヴァルソヴィア、ハンブルク・フィルハーモニー管弦楽団、ルツェルン音楽祭弦楽合奏団、ボルドー・アキテーヌ国立管弦楽団、ブリュッセル・フィルハーモニック等、数々のオーケストラと共演している。2017年、女性チェリストとしては初めてドイツ・グラモフォンと専属アーティスト契約を結び、2020年6月には2枚目のアルバム「Voice of Hope」が発売された。このアルバムにはトルコの作曲家ファジル・サイが彼女のために書いたチェロ協奏曲 "Never Give Up" が収録されている。2019年9月より日本音楽財団保有ストラディヴァリウス1730年製チェロ「フォイアマン」を使用している。



萩原麻未 (ピアノ)

Mami Hagiwara, piano

2010年第65回ジュネーヴ国際コンクール〈ピアノ部門〉において、日本人として初めて優勝。第27回パルマドーロ国際コンクールにて史上最年少の13歳で第1位。文化庁海外新進芸術家派遣員としてフランスに留学。日本、フランスを中心に、スイス、ドイツ、イタリア、ベネズエラ、ベトナムなどで

ソリスト、室内楽奏者として演奏活動を続けている。これまでに、国内主要オーケストラのほか、スイス・ロマンダ管、フランス国立ロワール管、南西ドイツ放送響などとも共演を重ねている。また、フランスのラ・ロック・ダンテロン等の様々な音楽祭にも招かれている。広島市民賞、第22回新日鉄音楽賞フレッシュアーティスト賞、第22回出光音楽賞、第46回東燃ゼネラル音楽賞 (奨励賞) など多数受賞。



ストラディヴァリウス1730年製チェロ「フォイアマン」

Stradivarius 1730 Cello "Feuermann" (日本音楽財団保有)

アントニオ・ストラディヴァリ(1644~1737)が製作したチェロのうち、現存するのは約50挺といわれている。「フォイアマン」は、普通のチェロと比べ楽器本体の部分が細長い点の特徴である。世界的に活躍した名チェロ奏者のエマヌエル・フォイアマン(1902~1942)が1939年から亡くなるまで世界各地で録音、演奏に使用したことから、この名前で呼ばれている。

本コンサートのチケット売上は、浦安市民の文化芸術活動の普及振興に活用されます。